
カンダタナイト

チョモ・ラマン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カンダタナイト

【Nコード】

N3525Z

【作者名】

チヨモ・ラマン

【あらすじ】

他人のために自分を犠牲にできる人間を、人はヒーローと呼ぶ。だが、その少年は違う。自分のために人を犠牲にする屑の中の屑、その名は神多田慧吾。

この少年が戦う理由はただ一つ。己の欲を満たすため也。

1、序章

僕は今、細い糸を必死でよじ登っている。

理由は良くわからない。そもそも自分が誰なのか、何故こんな場所にいるのかもわからない。

ただ自分の遥か下に広がっている『奈落の底』には落ちたくなかった。

だから、ひたすら登るしかない。いつ切れるともわからないこの細い糸を。

上へ上へと登っていくと大きな雲が見えてきた。

その雲の一部から金色の光が漏れている。僕は何故か、そこがこの苦しみから解き放ってくれるゴールだとわかった。

もう少し。もう少しでそのゴールにたどり着ける。僕がそう思った時、急に糸が揺れた。

ただでさえ細い糸がさらに張り詰めて細くなっているのが感触が伝わってくる。

何故？

下を見ると、そろそろと大勢の人が僕と同じように糸を登ってくる。

やめろ！登るな！降りろ！糸が切れるだろうが！！

僕は大声で怒鳴るが、そいつらは一向に僕の言うことを聞こうとしない。

仕方がない。

僕は足を使って自分の下の糸を引きちぎった。

奴らは叫び声を上げて奈落の底に落ちていった。

ざまあ見る。この糸は僕だけの物だ。勝手に登ろうとするからこう
いう目にあうんだ。

さて、後は僕がゴールに着くだけだ。

そう思つて、登り始めると上から声が聞こえた。

見上げると、雲の隙間から垂れている糸のすぐ近くに何者かの足が
見えた。

『なんと罪深い。なんと救い難い。やはりお前はただの罪人であつ
た。救いを与えるべきではなかった』

そう言つて、誰かはその糸を切つた。

一瞬の浮遊感。そして直後、僕の身体は重力の支配下に置かれた。

落ちる？

僕が？

何で？

罪深い？

救い難い？

ふざけるな。

「僕が」

「僕のために行動して」

「何が悪い！」

そう叫んだ瞬間、僕は重力の鎖を振りほどいた。僕の身体は上へと垂直に突き進む。雲の隙間に手を伸ばす。そして。

僕を落とそうとした憎きクソボケの足首をつかむ。

「お前が・・・落ちろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
」

そいつを雲から引きずり落とす。

まっ逆さまに奈落へと落ちていくそいつ。そして雲の上へと這い上
がる僕。

刹那、そいつの顔が見えた。そいつは以外にも女だった。

黒い髪に黒い瞳。整った顔立ち。芸術品のような美しさを放って
いた。

だが、浮かび上がっている表情は憎悪。凝り固まった怒りが全てを
台無しにしていた。

僕は落ちていくそいつに一言送った。

「お前が悪い」

気付くと僕はベットの中にいた。
「夢落ちかよ」

1、序章（後書き）

不定期な連載になるかもしれませんが、良ければ読んでください。

2、通学路

嫌な夢を見た。何故僕が奈落の底に突き落とされる夢を見なければいけないんだ。

それに何だ。あの人のことを罪人扱いしくさつた奴は？めいよきぞん名誉毀損でこつちが訴えてやろうか？！

まあ、いい。キッチンと夢の中で報復もできたし、許してやろう。

目覚まし時計を見る。

いつもの起床時間より十分ほど早い時刻だ。つまり、あのクソにも劣るふざけた夢は、この僕の睡眠時間を十分も削ったわけだ。思わず怒りが込み上げてくる。

落ち着け、僕。所詮は夢だ。しよせん気にすることはない。そもそも憎しみや怒りなんて何の特にもならない感情など、放って置けばいい。

僕はベットから起きて、制服に着替える。着替え終われば、洗面所で顔を洗い、ひげを剃る。そ

それが終わったならリビングへ行き、朝食を取る。いつもと変わらない僕の生活のリズムだ。

朝食といっても、それほど大したものじゃない。惣菜パンか菓子パン、もしくはカロリーメイトだ。

両親は共働きなので朝早く出掛ける。なので会う事はない。そもそも最後にまともに顔を合わせたのは一体いつだっただろうか。

どうでもいいか。生活費さえ出してくれば、外に愛人作ってようが別に構わない。いや、遺産の分け前が減るのは嫌だな。両親の死後、彼らの財産は全て僕に還元されるべきなのだから。

下らないことを考えている時ほど時間の流れは早く進むもので、あつという間に家を出なければいけない時刻になっていた。あまり教科書の入っていない学生鞆を持つと、僕は鍵を掛けて出てかける。

信号を渡り、バス停に着くと、丁度良くバスが到着した所だった。きっと僕の日頃の行いがいいからだろう。

座席は優先席以外、全て埋まっていた。なので僕は躊躇なくそこに座る。

つり革を握って突っ立てるバカ共は僕を非難がましい目で見てきたが、優先席はあくまで「優先」なだけなので別に座ることはマナー違反でもなんでもない。むしろ、「何か用か？」という目で睨み返すと急にそろって目を背ける。何がしたいんだ、お前らは。

二つほどバス停を過ぎるとジジイやババアがバスに乗り込んできた。だが、僕は席を譲るつもりは欠片もない。老人達は僕を見るが譲らない。

立て！立つんだ！ジジババ！！優先席なんか頼るから足腰が弱るんだ。

スタンドアップだ！年金受給者！！大正・昭和生まれの意地を見せしてみる！！

「おい」
僕が心の中で老人たちを叱咤激励していると、不意に声をかけられた。

見ると、そこには僕と同年齢くらいで同じ制服を着た高校生が立っていた。

「じいさんばあさんが困ってんだろ。マナー違反だ。さっさとそこ退けよ」

俺の方を睨んでそう怒鳴る。ちよいとガラが悪いが根は善人です、とでも言いたげな不良だ。

「いきなり『おい』で話しかける人間にマナーを説かれてもねえ？ それと君、必要以上に声が大きいかどひよっとして威嚇してるの？ 猿みたいで格好悪いから止めた方がいいぞ」

「ツんだと！ テメエー！！」

かるーく挑発すると簡単に乗ってきた。本当に猿なのか？

僕は殴りかかってきた猿男（仮）の腕を掴むと、文字通り軽くひねって転がした。

「うぎイツ！」

その拍子にガスッと優先席の横にある棒状の取っ手に顔をぶつけて悶絶する。

「おいおい。そんな所で寝るのは止めなよ。マナー違反だ。他の人たちの迷惑だろう？」

僕は倒れているそいつに向かって丁寧に注意をしてやる。

バスの乗客は巻き込まれまいと必死で知らん顔をして、誰一人彼の味方をするものはいない。

下らない偽善をするからこういう目に合うのだ。

丁度バスが学校の最寄のバス停に到着した。

僕は誰憚ることなく、堂々した所作でバスを降りた。文句を言う者は当然いなかった。

2、通学路（後書き）

全然ファンタジーじゃない上、進むのが遅いです。スイマセン。

3、転校生

私立霧が谷高校。

それが僕が通う高校の名前だ。取りたてて名物らしい物はなく、偏差値も下から数えた方が早い駄目な学校だ。はっきり言って役に立たない人間を生み出す、ニート育成機関と言っても過言ではない。唯一のいい所は僕の家からそこそこ近いことぐらいだ。

俺は校門をくぐり、下駄箱に向かう。

僕は自分の出席番号が書いてある下駄箱の扉を開けた。

「・・・？手紙か」

中にはピンク色の便箋びんせんが入っていた。

これは何だ？

ラブレター？果たし状？はたまた嫌がらせの手紙？

まあ、何だっでもいいか。

僕は手紙を隣の下駄箱の中に放り込んだ。

どんな意図があつて入れられたものかは知らないが、余計なトラブルに巻き込まれるのは御免だ。

きつと隣の下駄箱と間違えたのだろう。そういう事にした方が無難だ。

上履きを履いて教室に向かうとしよう。

教室に入るといつもよりも騒がしかった。

口から雑音しか発はっさないサルどもとは言え、これは妙だ。

誰か死んだのか？

いや、こいつらにそんな人の死を悲しむような慈愛の精神はない。

例え、クラスメイトが死んだところで花瓶すら用意しないだろう。

僕が思考を巡ら^{めぐ}せていると教室の教壇側の扉が開き、担任教師が入ってきた。

「おはよう、皆。もう知っている人もいると思うが、今日は皆に新しい友達を紹介するぞ。おゝい、入って来てくれ」
再び扉が開いて、一人の少女が入ってくる。

「初めまして。壬麓蓮華^{みろくれんか}と申します」

少女は黒板の前に立つと淡々とした愛想のない自己紹介をした。
見事なまでの無表情。クールとコミュニケーション障害を履き違えたような奴だった。

ただ俺はその少女、壬麓蓮華の顔に驚いている。
そっくりだった。

夢の中の俺が蹴落としたあの女に。

不意に目が合った。

あまりにも見つめすぎたせいか、睨みつけるような視線だった。
まるで夢の女のような憎悪のこもった眼差^{まなざし}し。
僕はイラッときたので思い切り睨み返す。

この少女とは初対面なのだ。理不尽に睨まれる謂^いわれはない。

しばし睨み合っていると担任が急に僕に話しかけてきた。

「何だ神多田^{かんだた}。壬麓と知り合いだったのか。なら壬麓の席は神多田の隣にしよう」

僕に一切許可も取らず、空気の読めない発言をかましやがった。こいつの脳みそは醗酵しているのだろうか。

仮にこいつと知り合いだつたとしても、今のやり取りを見れば友好的な関係でないことは一目で分かるはずだ。

そんなだから、いつまで経っても生徒に人望がないんだよ。カス教師。

僕は担任にあらん限りの呪詛じゆそを送つたが、僕の席の隣が空席だつたことと王麓おんろくが以外にも反対しなかつたせいで結局、王麓の席は俺の隣となつた。

休み時間になると騒ぐことしか脳のないクラスメイトが王麓の周りに寄ってくる。

僕は己の不快指数が限界を超えたので席から立って、教室を出て行くとした。

「ちよつと待つて」

クラスメイトの質問に答えていた王麓が僕に静止しづなを促した。

だが、僕は聞こえなかつたように教室から出て行つた。初対面で睨みつけてくる女の言うことを素直に聞いてやる理由はない。

3、転校生（後書き）

新年明けましておめでとございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3525z/>

カンダタナイト

2012年1月2日02時52分発行